

ハウスミカンにおけるミカンキイロアザミウマの発生と防除対策

1. 発生と分布

ミカンキイロアザミウマは、アメリカ合衆国西部を起源とする侵入害虫であり、各種果樹や花卉類など多くの植物に寄生する。日本では、1990年9月に埼玉・千葉県のガーベラやシクラメン等の花卉類で初めて発見され、全国に分布を拡大した。

愛媛県では、1994年12月に丹原町のバラで、初めて発生が確認された。その後、1995年に東予市のイチゴと砥部町のナスで、1996年に丹原町のアスパラガス、ハウスミカンと砥部町のハウスミカンで発生が確認された。1997年には砥部町のハウスミカンで大発生し、その後砥部町を中心に伊予市や双海町で甚大な被害を受けるようになった。南予地域でも、吉田町の一部のハウスミカンで大発生し、大きな被害を受けている。

現在、この虫はハウスミカン農家が最も警戒している害虫の一つになっている。

2. 被害の特徴

この虫の被害は、ハウス栽培に限られており、露地栽培では、花には多くの寄生がみられるものの実害は認められていない。

ハウス栽培では、果実が着色し始める頃から、成虫が飛来し、果皮を吸汁加害するとともに産卵する。その後、収穫期にかけて急激に増殖し、大きな被害をもたらす。被害果は、写真のように吸汁部分が白いかすり状の斑点として残り、特に集中して加害を受けた場合は、その部分から腐敗する。



写真 ミカンキイロアザミウマによる被害果

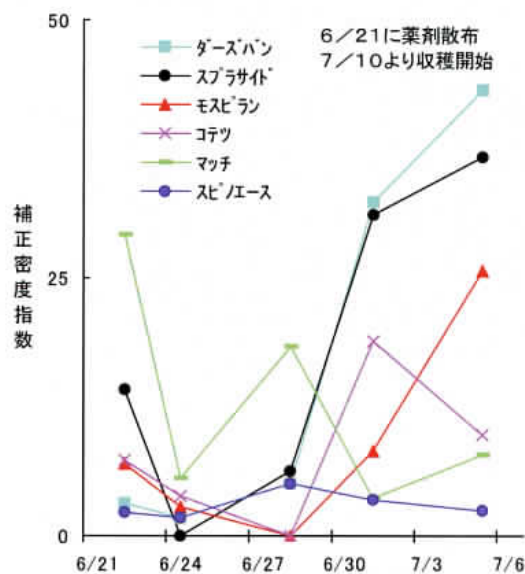
3. 防除対策

この虫が、ミカンに寄生できる時期と部位は、基本的には開花時期の花と着色期以降の

果実に限られる。これ以外の時期は、ハウス内の雑草や野外の植物に寄生して世代をくりかえしている。このため、ハウス内部や周辺部の除草は、発生源を絶つ意味で、極めて重要である。

この虫は、比較的薬剤に強く、外部から次々に飛来してくるため、多発園では、繰り返し薬剤散布が必要となる。

薬剤試験では、図に示すようにスピノエースフロアブル6,000倍（現在登録申請中、平成15年1月登録予定）、マッチ乳剤3,000倍、コテツフロアブル4,000倍の3剤は2週間以上、モスピラン水溶剤2,000倍は約10日間、スプラサイド水和剤1,500倍とダズバン水和剤1,000倍は約7日間程度の残効性が期待できる。他剤では、DDVP乳剤やカスケード乳剤も有効であり、これらの薬剤を有効に使用すると良い。



図、ハウスミカンのアザミウマ類に対する薬剤の防除効果 (双海町、2002年)

(虫害班 主任研究員 金崎秀司)

編集発行 愛媛県立果樹試験場
〒791-0112
松山市下伊台町1618
TEL 089-977-2100
FAX 089-977-2451